感覚が支配する世界

勝つために、全ての要素を足し算で―。

優勝するために、全ての要素を掛け算で導きださなければならない。

1つでもゼロやマイナスになれば、それは失敗を意味し、行く先には地獄が待っている。

サッカーには、チームの目指すべき哲学があり、それを保証するためのシステムがあり、選手を連動させるためのフォーメーションがある。例えばACミランとバルセロナが違う様に、駒大と流経大もまた違う。

特に「タフ」であることが基本的かつ最重要項目に挙げられるだろう。精神的にも、肉体的にもだ。

世界を渡り歩き、日本人がサッカーで成長するために、人として成長するために秋田監督が表現するサッカーの根本は、常にタフを求める。

そして常に勝利を求め続け、いつしか勝利を義務と位置づけるまでに持っていくチーム力は、一見すれば矛盾のようだがそうではない。移籍マーケットがなければ、不平や不満に声を上げるサポーターの存在もいない大学サッカー界という特殊な環境で生き残るための、1つの手段なのだ。

裏打ちされるのは、選手を観察する目だ。

とにかく眼光が鋭い。近くにいるこちらまでもが戦慄するほどの恐ろしい目をぎらつかせることもある。

秋田監督にとっては、一戦一戦が真剣勝負なのを痛いほど解っているからだろうし、痛みを知ってるからこそ厳しくなれるのだろう。

◇

サッカー場に行くと、頻繁にこんな言葉を聞くようになった。「考えろ!」。

最近でいえば「接近・展開・連続」。その言葉が独り歩きしようが、しかも意外な程に早い段階から、指導者や選手を問わず浸透する。

そんな世間の流れに逆行―いや、自分たちが目指すサッカー哲学に自信と誇りを持ち、何年と変わらず確固たる強さを持ち続けてきたのが駒澤大学である。

よくガムシャラになってボールを追いかける姿を「気持ちがあるプレー」という。だが、そもそも「気持ち」がなければプレーも何も行動すら生まれない。そこにあるのは、勝利を求める貪欲なまでの闘争心のみしかない。

一見するとシンプルに捉えがちな駒大サッカー。だが、実は複雑だ。

複雑にするのは、プレーする選手の「感情」。スポーツは人間がするものだし、いくら理想が高くてもそれに追いつき、コントロールすることができなければ無用の長物になってしまう。

では、前線へボールを送り続ける駒大のサッカーは理想が低いのか。そうではない。

精神論になってしまうかもしれないが、最後は気持ちで勝負が決まるのだ。いくら股抜きフェイントをしようが、オーバーヘッドをしようが、5人抜きドリブルをしようがサッカーはゴールの合計点を競うスポーツ。度肝を抜く程のワザで勝負が決まるのではない。

少しだけ他より優れている選手がいたとしても、「強くなりたい」「勝ちたい」という気持ちがなければその後の成長はない。

それを徹底的に身に染み込ませることを大事にしたからこそ、常に成長することの大事さを説いてきたからこそ、駒大が大学サッカー屈指の名門になれた所以だろう。

プロサッカー選手は平均して27歳でキャリアを終えるが、人生はまだまだ先が長い。サッカーで成長が止まっても、人としての成長は無限にある。アマチュアの世界でしかこんなことはできないし、実は駒大サッカーは奥が深く、フィールド内外で求められる理想は非常に高いのだ。

◇

いよいよリーグが再開される。

振り返ってみれば、前期リーグ開幕前は選手までもが「2部に落ちかねない実力なので」と漏らしていたが、現在は3位。優勝を狙えるにはまだ十分な位置にいる。

大事なのは、優勝を達成するまで試合ごとの勝利に酔いしれすぎないこと。

サッカーでも他のスポーツでも、大きな勝利から爆発的な感情を発散するあまりに、自分達で歯車を狂わし、志半ばにして敗れ去った例はいくらでもある。

真剣勝負が連続するリーグ戦には、ロスタイムになるまで何が起こるかわからない試合が必ずある。だが、最後まで地に足を着ける感覚で。全ての要素をプラスに置き換えて―。

スタンドから聞こえてくる声援や、ボールの蹴る音、体と体が激しくぶつかり合う瞬間を見逃さず、人生をサッカーボールと共に歩んできた選手達のプレーに幸運を祈る。

感覚の支配する世界がまたスタートする。

吉岡克洋
コマスポ記者であると同時に、日本代表のゴール裏で熱い声援を送り続ける。「ZEAL」メンバー。
２月には中国の重慶で現地の公安警察と口論になったり、８月の雷雨で中止になったU23 アルゼンチン戦では iPodと携帯が沈没するなど、何かと残念な男でもある。
カントリーマアムが主食。